



# 6.4 京院協講演会



「今問われる研究者としての成長——院生時代にどう研究力量をつけるか——」

時：6月4日(土) P.M. 1:00~4:00

所：工学部8号館 208号室 (中央食堂2F)



講師：鯨坂真先生 (関西大学教授 文学部 哲学)

松柳研一先生 (京大助教授 理学部 原子核)

京院協 主催  
JSA京大支部

前回、前々回の講演会の案内ビラでは、講師のプロフィールと講演の論点について簡単に報告いたしました。今回のビラでは先日5月24日に松柳先生と講演内容についての最終的な打ち合わせを行なった際に明らかとなった具体的内容について少し予告編的に紹介したいと思います。

## 松柳先生「若手とは」

先生は「研究者としての成長」というテーマに対し、how-toものでなく、何を研究するのか、どういう研究者になるのかといった問題について日頃思っていることを大胆、率直に語りたいとあらしやられました。その内容は、先生自らの大学院時代の経験にもとづくものであると同時に、その時代に集団形成の運動や院会活動を通じて同じ世代の話し合いの中で練りあげられたものでもあるそうです。

## I 自然科学の現代的性格

今日、自然科学の方向には二つの方向があります。一つはよりミクロへミクロへと向う細分化の方向であり、他方はミクロの構成要素が集団になった時に生じる新しい法則の発見へと向う統合の方向であります。これらの方向は矛盾するものと捉えられがちですが、二者を統合的に考えてゆく重要性と意味を先生の専門である原子核理論に触れながら語られるそうです。この部分では更に、いわゆる高度情報化社会について触れ、そこから研究者集団の形成の重要性にまで話を進められる予定です。物理学の分野だけでも年間数万、数十万の論文が発表されており当然のことながらほとんどのものは読めないというのが現状です。そこで研究者間の交流が必要になってくるとおっしゃられます。しかも論文は実証された結果をみたもの、いわばきらいごとしか語ってくださらないが、研究者間の直接の

交流は、研究上のつまづき、悩みまづも相互に理解し合うことも可能にします。こういう研究者の直接の交流こそ研究の発展の原動力があるのだとおっしゃられました。弁証法= dialectic のそもそもの語源は対話だそうで、対立する意見を交わすことによって真理を発見する、これがまさに学問研究の発展の鉄則だそうです。

## ② 科学者に求められる見識——現代の核問題

研究者として自らの専門を深め、広い学問分野を見渡せることは大切ですが、それだけでは足りません。すなわち科学者としての見識が求められます。とりわけ科学のあり方が国策を抜きにしては考えられない時代となっているだけに、科学者一人一人が社会的責任を果してゆくことが、今ほど求められている時はないとおっしゃられています。先生の原子核という領域では軍事利用という大きな問題に誰もが直面しますが、研究の成果の社会的環元の多様な道めぐって具体的な話もあり混ぜながら社会への貢献と科学者の見識の問題を考えてゆきたいとおっしゃられています。

## ③ 大学院時代の課題——「成長」への多様な道

すべての研究者にはそれぞれに個性があり、構造的なパターンは乗っかろうとすることが一番だめだというのが先生のお考えであるようです。そもそも大学院制度というものは、天才といわれるような人は別として、多様な個性を持った普通の人間を研究者として成長させてゆく課題に取り組む場であり、一つの型にはめこむ場であってはなりません。若手院生は、小さなことでもこれができる

という自信を持っては思わぬ力を発揮してくるものであり、そこから準備範囲を広げながら「多様な成長の道」をたどるものであります。若手は未熟であることは当然のことですが、しかし若手はそれ以上に古手のできないものを必ずもっている存在でもあります。このことは常に学問を新しくしてきたのは若手であったという事実が物語っているわけですが、こういう意味でそれぞれの研究室は、若手院生の多様な個性に対応し成長を保障してゆくことの重大な意味を自覚しなければなりません。すぐれた研究室からはすぐれた研究者が育つといわれますが、しかしすべての研究室が環境にめぐまれているわけではないので、若手が研究者集団を作ることの重要性がそこにも見出されるわけですね。

## ④ OD問題の現実——我が研究室の周辺にみる

松柳先生の研究室ではODが8名おられるそうですがそのうち7名が海外におられるそうです。その人たちは海外でとても重宝がられているそうです。というのも西ドイツの原子核理論は日本人が支えているといわれるほど彼らの活躍がめざましいからだそうです。このことは一考では日本の学界、社会の大きな損失を意味しており、日本の研究者養成政策の貧困さというが、そのクチくささにはあきれるばかりだと語っておられます。ここには更に日本学術会議が「研究者養成の振興策について」という要望書を作成する際に作ったワーキンググループの議論にも触れたいとのことでした。

## ⑤ 若手運動とは——高い目標をかけた研究者集団の形成を

若手運動、若手研究者集団は未熟であってもよいけれども高い目標をかけた、それに向って常に努力する気概を持って頑張ってもらいたい。何のための研究者集団かという点、独善を排すということももちろんのことですが、研究にしても個人のやることはたかが知れています。個人で追求していることなど本人がやらなくとも他の誰かでもやるものです。また研究室のスタッフの小型の研究者をさがすようなこともあまりにつまりません。個人個人が、集団の中で、当面のことではなく少くとも10年先を見据えた目標を、そして個人ではやり切れないような高い高い目標を模索してほしいというのが、先生が私達に期待されていることだそうです。